

南向村誌編纂のエピソード

『下伊那誌編纂委員の M 氏は「南向村誌から被官の項を除いたら価値が半減する。」と言ってくれました。もう一人の M さんは、「その村の中に這入っていると書きにくいだろう」と同情してくれました。ありていに言って、御館と被官と言う旧時代の観念は殆ど希薄になり、若い人々にはそういった世界のあったことすら忘れられています。しかし結婚問題、縁ぐみとなると老人や相当年配の人々の間には今もって此の観念が頭をもたげて「おかどだから」とか「おした」だとかいってぶちこわしになる例がずいぶんあります。御柱年には結婚をしてはいけないとか、おかどへは嫁をやれないとか丙午の女はどうとかいう考はこれは正に旧世態の残滓で、そういう考が頭にこびりついているものこそ嘲笑されるべきものでしょう。』『『南向村の被官資料』下平加賀雄著」

関係者から「差別問題が存在していたので、村誌編纂の際、この問題を書くか議論をしたが、結局書かないこととした経緯がある。」と聞いた。

この種の問題が村民を刺激することにならないか心配していた様子だった。

(川端紅葉著 2026・9・5)



「坂戸橋(應平橋)」 ©川端紅葉